

「平和への祈り」と「核廃絶の願い」を込め—二つの被爆地から重い訴え ローマ教皇 38年ぶりに訪日

新妻義輔（常任世話人）

約13億人の信者がいるローマ・カトリック教会の頂点に立つフランシスコ教皇が2019年11月23日夜から26日まで日本を訪問しました。「すべてのいのちを守るため」が訪日のテーマで、教皇は二つの被爆地、長崎と広島でのメッセージに「平和への祈り」と「核兵器廃絶の願い」を込めていました。教皇はわかりやすく、はっきりした言葉で呼びかけました。「心から声を合わせて叫びましょう。戦争はもういらぬ！兵器のごうお音はもういらぬ！こんな苦しみはもういらぬ！」と。

ローマ教皇は約13億人の信者にとって精神的指導者というだけでなく、米国とキューバの国交回復を仲介するなど平和外交でも存在感を示している人物です。

「戦争は人間の仕業、生命の破壊」 38年前、故ヨハネ・パウロ2世

38年前の1981年来日した、ローマ教皇、ヨハネ・パウロ2世(故人)は平和アピールで「戦争は人間の仕業です。戦争は人間の生命の破壊です。戦争は死です」と訴えていました。

約13億人の信者のトップのローマ教皇のメッセージは指導者だけでなくすべての人々に向けられており、核軍縮の動きを政治家だけでなく、市民にも求めています。これらはカトリック教徒が多い国をはじめ各国の世論に影響を与えます。

軍拡競争は「テロ行為」

ローマ教皇は2019年11月24日、長崎市の爆心地公園で、「核兵器についてのメッセージ」を読み上げ、長崎を「核兵器が人道的にも環境にも悲劇的な結末をもたらすことの証人である町です」と表現。兵器の製造や維持、改良などを進める軍拡競争を「日ごとに武器は、いっそう破壊的になっています。これは途方もないテロ行為です」と強い表現で非難し、世界の政治指導者に向かって、「核兵器は安全保障への脅威から私たちを守ってくれるものではない、そう心に刻んでください」と訴えました。

核の脅威に団結を

「核兵器から解放された平和な世界を、数えきれないほどの人たちが熱望している。それを実現するには、すべての人の参加が必要です」と強調。「核兵器の脅威に対しては、一致団結し応じなければなりません」と呼びかけました。

写真「焼き場に立つ少年」 千の言葉より多く語る

長崎の爆心地公園での「核兵器についてのメッセージ」を読み上げるローマ教皇の右側の少し離れたところに、1945年に長崎原爆投下の被災者の姿をとらえた、「焼き場に立つ少年」の写真パネルが掲示されていました。撮影者は米従軍カメラマンのジョー・オダネルさん(故人)。教皇は2018年の元旦、この写真をカードに印刷して配布するよう指示しました。カードの裏には「戦争をもたらすもの」という言葉と教皇のサインがつづられています。亡くなった弟を背負い焼き場で順番を待っているこの少年は、血がにじむほど唇をかみしめており、やり場のない悲しみがあらわれています。

フランシスコ教皇は「このような写真が千の言葉よりも多くを語る。だから分かち合いた

いと思った」と話していました。

「核抑止論」を批判 核兵器の保有は「倫理に反する」

フランシスコ教皇は11月24日の広島市の平和公園でのスピーチでは、「核兵器を保有することは倫理に反する」としたうえで、「戦争のための最新鋭で強力な兵器を製造しながら、平和について話すことなどどうしてできるでしょうか」と述べ、核兵器を保有することで戦争を防ぐとする「核抑止論」を批判しました。

さらに、「戦争のために原子力を使用することは現代において、犯罪以外のなにものでもありません。倫理に反します。核兵器の保有は、それ自体が倫理に反しています」「核戦争の脅威で威嚇することに頼りながら、どうして平和をできるでしょうか」と根源的な問いかけをしました。

「核廃絶の運動に勇気と支え」 サーロー節子さん

広島の集いに出席した被爆者で、2017年のノーベル平和賞で演説したカナダ在住のサーロー節子さん(87)は「一言一言、力強い意味があり、重く突き刺さり、胸に響きました」と語りました。さらに、核兵器「抑止力」論を真正面から否定したことについて「非常に勇敢な思いを發表された。私だけでなく核兵器廃絶の運動にかかわっているすべての人に素晴らしい勇気と支え、今後続けていく方向性を示してくれた」と歓迎していました。

被爆者証言を翻訳、世界に伝える若者 教皇の招待で参加

広島の「平和のための集い」には、被爆者の証言を多言語で翻訳して世界に伝えているグループ「被爆者証言の世界化ネットワーク」のメンバーの一人、京都外国語大学の卒業生、阿比留高広さん(25)の姿がありました。フランシスコ教皇から約20メートルの席で、スピーチに真剣に耳を傾けていました。阿比留さんは2018年12月に、広島・長崎とともに原爆投下の候補地になっていた京都への来訪を願う手紙を日本語、英語、スペイン語で書き、ローマ教皇に送っていました。返事はこなかったが、2019年11月20日になって広島の「平和のための集い」への招待状が届きました。核兵器廃絶運動や平和活動への若者の参加は少ない。阿比留さんは「教皇のメッセージが一人でも多くの若者に届く」ことを心から願っていました。

原発廃止を支持

ローマ教皇は11月25日、東京電力福島第一原発事故の避難者らと都内で面会した際、「将来のエネルギー源について、勇気ある重大な決断が必要だ」、「核エネルギーについては議論があるが、いまだに安全性が保障されておらず、限界がある」と演説していました。東京のミサには東日本大震災の被災者を招き「原子力の継続使用経の懸念」を示し、11月25日に東京電力福島第一原発事故の避難者他と都内で面談。「将来のエネルギー源について、勇気ある重大な決断が必要です」と語りました。フランシスコ教皇が2019年11月26日、日本を離れた特別機内で記者会見し、原子力発電について「安全が保障されない限り、核エネルギーは使うべきではない」と述べました。訪日中の発言よりもさらに強い言葉で、原子力エネルギーの利用の見直しを全世界に訴えました。

パチカン 核兵器禁止条約をいち早く批准

核兵器の開発・実験・製造・保有・使用・威嚇を禁止する、史上初めての核兵器禁止条約が2017年7月に国連で122カ国の賛成で採択され、これまでに70カ国が署名、33国が批准しています。パチカンは2017年7月に「核兵器禁止条約」が採択されたあと、いち早く批准しました。50カ国が批准すれば発効します。

核兵器禁止条約に背を向け続ける安倍政権 「抑止力は必要」

安倍政権は、日本が米国の「核の傘」に守られていることを理由に核兵器禁止条約に背を向けつづけています。また、フランシスコ教皇が「核抑止力」を否定したことにつて、菅官房長官は11月25日の記者会見で、「核抑止力を含めた抑止が、わが国の安全保障を確保していく上での基礎であることに変わりはない」と反論しました。

核軍縮に逆行 「終末時計」は滅亡まであと2分

核軍縮をめぐるのは、米ロ間の中距離核戦力（INF）全廃条約が2019年8月に失効。米ロの新戦略兵器削減条約（新START）が2021年に期限切れを迎えるが、延長の議論は停滞しています。さらに、核保有国を米国・ロシア・英国・仏・中国の5カ国に限定し、保有国に核軍縮交渉を義務づけている核拡散防止条約（NPT）の5年ごとの再検討会議が2020年4月に迫っていますが、核廃絶に向けた環境は悪化しています。

米科学誌が公表する「終末時計」はいま、「核使用のリスクが高まっている」として「地球滅亡まであと2分」と警鐘をならしています。

停滞する核軍縮に深い懸念

ローマ教皇は長崎、広島演説で、核軍縮をめぐる停滞する国際社会の動きに対し、深い懸念を表明。長崎では「兵器使用を制限する国際的な枠組みが崩壊する危険がある」「多国間主義の衰退を目の当たりにしている」などと指摘。広島では、核廃絶に向けた行動がなければ、「次の世代の人々が私たちの失態を裁く裁判官として立ち上がるでしょう」と警告しました。

教皇の重い訴え 今こそ「核なき世界」へ新たな一歩を

ローマ教皇は「核なき世界は可能であり、必要だ」と力説しています。だが、待っているだけでは理想は実現しません。唯一の戦争被爆国である日本の政治家も、私たち市民も、被爆地からのローマ教皇の重い訴えを受け止め、今こそ、核廃絶の必要性を世論に訴え、「核なき世界」を実現する道を切り拓くために、大きな一歩を踏み出す決意と覚悟を新たに固めるときです。

（元朝日新聞大阪本社編集局長）